

## 英語コミュニケーション授業の実例報告： 出席確認とグループによる言語活動

福井 龍太(三重大学共通教育センター)

### 1. はじめに

大学の英語の授業の質をいかに保証するかについては、多くの大学で喫緊の課題となっている。現在、各大学当局は、カリキュラムを改正したり、授業数を変動させたり、教授する内容を検討したりすることによってこの課題に立ち向かっている。大学の英語教育のシステムに着目して改革を図ることは確かに重要で、劇的な効果を上げた例も報告されている。大学のしかるべき立場で、このような改革を断行している方々の様々な取り組みには学ぶべきところが多い。

一方、このような劇的な改革は、そのような改革が可能な立場にある教授陣にしか行えないという側面がある。筆者のような立場の教員においては、大学教育システム自体にアプローチすることは難しい。それでも、一大学教員として学生の授業を担当する立場には変わりなく、筆者にはよりよい英語教育を行うために寄与したいという強い希望がある。このような立場から切り込むことができるのは、まさに自分自身が行う授業である。大学の英語教育のシステム自体の問題点に目を向けることは無論必要である。それと同時に、現時点で与えられたシステムの中でどのように毎回の英語の授業を行い、学生に必要な英語運用能力を効果的に身につけてもらうべきかについて考え、実践することもまた必要である。学生が大学に入学してまず目の当たりにするのは、大学教育システムではなく、毎回出席する授業である。高橋<sup>1)</sup>は、生徒の学習を一番大きく左右するものは、なんと言っても教師の教え方である、と述べているが、これは結局のところ、学生に英語運用能力を効果的に身につけさせられるかどうかは、個々の教員が行う授業ひとつひとつに係っているということである。

本論では、他教員の授業や、日本やアメリカの小中高等学校、英会話学校、先行研究や実践報告といった、様々なものからの成功例を取り入れることで、学生に必要な英語力を効果的に身につけてもらうために筆者が大学初年次向けの授業内、特に三重大学共通教育センター外国語科目「英語 I コミュニケーション」で実践した英語教育の実例のうち、出席確認の方法と、グループ毎のコミュニケーション活動について報告する。

### 2. 実践例の報告

#### 2.1 出席棒：出席に即興性を与え、出席する意味のある、出席したくなる授業にする

大学の授業において、出席の位置づけは様々である。遅刻した場合には欠席とみなすほか、一度でも欠席すると単位取得を認めないといった、出席を極めて重要なものとみなし、出席回数を成績評定に組み込む授業もあれば、期待される能力が身につくまでさえいけばいいので、出席は全く取らず、成績評価は期末試験のみで行うという授業もある。

大学初年次の英語教育にあつては、英語運用能力を効果的に習得するために、学生は授業内で言語活動を行う必要があり、特に英語でのコミュニケーションを扱う授業では、故に授業への出席は極めて重要視される。

しかし、単に出席を点呼して記録する方式で確認することからだけでは、学生が授業に出席する、あるいは出席し続ける動機付けにはならないようである。とりわけ第 1 時限の授業では、出席を取ることがあらかじめ知らされていながら、出席を諦めてしまう学生がいる。また、昼食直後の授業時限である場合には、学生は集中力が維持できないと訴える。学生のひとりによれば、授業開始直後に出席が確認されるだけであると、どうしても眠くなってしまふという。

さらに、授業への出席を重視していながら、授業に出席せずに自学自習の方がよりよい成績を得られるような授業構成となっている場合、学生は出席に対する動機を維持できない。教員も学生も、忙しい中で貴重な時間を授業のために費やす。故に、授業への出席を重視するならば、出席しなければ得ることのできない情報や機会を十分に提供し、意味のある出席となるように教員は配慮すべきである。出席しなくても学生が単独で学習できる内容のみが授業で扱われるのであれば、出席を重視する意味がない。

加えて、英語 I コミュニケーションの授業は、やはり英語によるコミュニケーションを授業内外で十分に行えるように構成すべきである。英語の新出単語や表現を学んだり、リスニング能力を身につけたりすることが重要であることは言うまでもなく、筆者の授業でもしばしば取り扱うが、それはあくまでコミュニケーションを円滑に行うために副次的に必要なものに過ぎず、それを学ぶことが英語 I コミュニケーションの授業の中心であるわけではない。むしろこれらについては、学生が授業

前後に自学自習できるように教材を提示するか、moodle の活用を検討するべきである。

このような出席に関わる問題を解決し、学生の出席を動機づけるために、「出席棒」を用意し、これを用いて出席を確認することとした。出席棒とは、元新潟大学教授で英語教育学者の高橋正夫先生の考案によるものである。筆者が学部生であった



(写真：出席棒の例)

ときに用いられていたものに基づいて、多少の変更を加えている。

出席棒とは、学生がひとり1本準備し、毎回の授業で用いるものである。初回授業で作成の仕方を英語で説明し、2回目の授業で回収する。まず、割り箸を1膳準備し、丁寧に割る。その片方を用いる。一般に販売されている割り箸はおよそ20センチメートルの長さであるが、これに1センチメートル間隔の印を15個つける。15は、授業回数と一致する。余った5センチメートルの部分に、名前と学籍番号を記入する。別の素材を用いてもよいが、予算をかけず、入手しやすい材料を用いたいという意図で、割り箸を選択している。出席棒は回収し、上部をくりぬいた缶に入れる。

回収したばかりの出席棒をそこから教員がくじのように一本引いて、さっそく英語でのコミュニケーションの練習が始まる。教員は出席棒に書かれた名前を呼んで、学生とお互いに簡単に自己紹介をした後、その日に扱う教科書に書かれた学習対象となる例文を含む会話を即興で行う。「英語 I コミュニケーション」の授業では、ケンブリッジ出版の Interchange<sup>2)</sup> を教科書として全クラス共通で使用しているが、扱われている文法事項は、学生は中学校や高等学校で繰り返し学んできているものであり、非常に易しい、易しすぎると言う学生もいる。しかし、対象となっている文法事項を用いて発話したり、聞き取ったりする活動を実際にやってみると、思ったほど容易ではないと学生はすぐに理解するようである。さらに、前の方に座った学生から順番だったり、学籍番号順に指されたりするのではない上に、内容も即興であるため、学生にとってはいい緊張感をもって授業

に参加できる。早朝や昼食後の授業であっても、集中力が途切れてしまうことはない。また、教員の側にも、学生みなに声をかけるので、学生の顔色を見ながら、学生の能力に合わせた授業が展開できるという利点がある。

一度に2本の出席棒を引き、学生同士で会話をしてもらったり、学生に出席棒一式を渡して、教員役をやってもらうことも可能である。くじを引くように任意の学生が選択されるので、今までに話したことがなかった学生同士が会話する機会が生まれる。十分なインフォメーションギャップを含む、自然なコミュニケーションの機会を即座に作り出すことができるのである。はじめは会話が途切れがちになってしまうこともあるが、その際には、状況設定を詳細にすると話しやすくなる。具体的には、場所を駅や空港、コンビニエンスストア、学食に指定する、学生同士の関係を見ず知らずの他人や、仲の良い友人、教員と学生であるとする、あるいは時刻を平日の早朝や、休日の午後指定すると、英語で会話を始める際の取りかかりが設定しやすくなるということである。



(写真：学生によるペアでの会話の様子)

出席棒を用いる利点は他にもある。大学の教室に足を運ぶと、後方に着席者が多く、前方には比較的少ないことが多い。さらに、友人・知人が隣り合って着席していることが多い。この状態でコミュニケーションの練習を始めても、友人同士であるが故に、英語ではなくて日本語を用いはじめてしまい、練習にならなくなってしまうことがある。席順を指定するという方法もあるが、筆者のコミュニケーションの授業はしばしば演習のために座席移動を伴うので適切ではない。この場合、出席棒を用いてなれば強制的に新しいペアをその場で作り、新しいペアで演習させる。すると、普段話したことがない学生同士が話をすることになり、新鮮でかつ緊張感のあるコミュニケーションの練習が行える。このペアで会話文を作り、それを練習して発表するという課題を課すこともできる。協力して課題に取り組みねばならない上、成績評価にお互いが影響するため、学生は緊

張感を持って発表に取り組んでくれる。場合によっては、出席棒を教室前方の席に一本ずつ置いていき、そこに学生が着席するように指示すれば、授業中に後方の席で授業に集中できない学生を生むことも防げる。授業の度に新しいペアを作るので、学生はいろいろな学生とコミュニケーションを取ることとなる。先日、かつて筆者の授業を受講していた学生たちが大学のキャンパスで声をかけてきて、筆者の英語の授業がきっかけで友人関係が続いていると言っていた。英語コミュニケーションの授業で、英語運用能力だけではなく、新たな人間関係が構築できるのであれば、これもまた学生の大きな財産となるであろう。このような新たな学生同士のつながりが生じるのは、学生が授業内で、繰り返し良質なコミュニケーションを取ることによって成功したからに他ならない。

さらに、出席棒を一度に数本まとめて引くことによって、任意の数のグループを作ることもできる。筆者の授業では、このようにして作ったグループで、コミュニケーション活動を繰り返し行った。教科書のリスニング演習部分やウェブから取得したニュース音声などをカセットテープに録音し、各グループにカセットテーププレーヤーを貸すことによって、グループ毎に協力してディクテーションを行い、答案を交換してお互いに採点しあったり、グループ代表に答案を板書してもらい、クラス全体で検討したりして、競って正確なリスニング力の醸成を目指した。



(写真：グループリスニングの様子)

また、教科書(Interchange)には、料理の手順を説明するという項目があるが、手順や行程を説明するという演習をさらに行うために、無料で公開されている、工場で食品や日用品を製造する工程を記録した映像(ザ・メイキング)<sup>3)</sup>の中から、グループ毎に好みのものを選択し、英語で説明する演習も行った。

出席棒の活用は、これまで単なる事務的な作業でしかなかった出席確認を、即興性を帯び、即座に英語コミュニケーションの訓練の場とすることができる。大学の英語の授業内で意味のある言語活動を行わせるためには、出席棒はひとつの可能な選択肢である。

## 2.2 あなたなら三重大をどう変えるか：ブレインストーミングと意見表出

受講当初は緊張し、挨拶さえもぎこちなかった学生たちが、1年を通して英語によるコミュニケーションの機会を繰り返し与えられると、英語で自分を表現することに慣れ親しみ、その快感や喜びを悟るようになる。すると、何らかの身近な事柄について、まとまった意見を述べることに、学生は興味を持つようになる。

このような学生の希望がみられるようになったとき、自分の意見を英語で表出し、それらを学生同士で比較、検討し、皆の意見を集約して主張するという活動を行うと非常に教室が盛り上がる。筆者は、2010年1月に三重大国際交流センター主催で行われた全学FD「英語で授業する」において実践したブレインストーミングと、2012年1月に山本俊彦共通教育センター長の発案により、三重大共通教育センター主催で行われた「学生と共通教育を語る会—近くでトーク—」における学生に密着したテーマ設定を参考にして、英語Iコミュニケーションの授業でも、学生に三重大をよりよくすることをテーマに、意見表出の練習を行わせた。教科書で取り上げられている仮定法の使用を考え、授業内タイトルは「もし私が三重大の学長だったら(If I were the president of Mie University, . . .)」とした。

出席棒によって教室内に4人ないしは5人のグループを作り、半分に切った大判用紙(模造紙)と、ペン、大きめの付箋を配布する。まず、大判用紙の上半分に、ブレインストーミングを行う。三重大について思いつくことを英語で付箋に書き込んで、できるだけたくさんあげてもらう。それを三重大の良い点と改善点に分類してもらう。

改善点に着目し、もし自分たちが三重大の学長だったら、どんな提言ができるか、英語で大判用紙の下半分にまとめてもらう。最後にクラスでグループ毎にまとめたものを発表して意見交換する。これを授業1時間かけて行った。



(写真：ブレインストーミングの様子)

学生は興味を持って英語を用いて活動していたが、ブレインストーミングでは一人あたり10個程度と、期待した数の情報が生み出されたわけではない。これについては繰り返し訓練することで改善していくものと思われる。また、書かれている英語や、発表にも用いられた英語の正確さについても、改善の余地が少なくないが、これについても繰り返し練習することによって改善がはかれることが期待される。ただ、このような活動を学生がするのは初めてであったということもあり、あまり些細な英語の訂正を行うことはせず、相手に伝えることを念頭に活動を行わせた。



(写真：発表の様子)

なお、作成した大判用紙は、記名の上、一定期間掲示することによって事前に知らせてある。他人にも見てもらうとっておくことは、課題により集中して取り組む動機となる。また、あらかじめ学生の同意を得た上で、必要の範囲内で写真やビデオの撮影を行う、会場を通常の教室と異なる場所にする、マイクやBGMを準備する、授業を他のクラスの学生や教職員に公開するといったことも、良い意味で発表の緊張感を高め、より効果的な言語活動を行うことを可能にする。

### 3. おわりに

本論では、筆者の三重大学在任中(2009年4月-2012年3月)に担当した三重大学共通教育センター英語Iコミュニケーションの授業において実践した英語教育の様々な取り組みのうち、出席確認とグループ活動について報告した。小学校英語教育の導入や、英会話学校の増加からも見て取れるように、使える英語の身につけるための教育があらゆる場所で模索されている。そのような状況だからこそ、小中高等学校とも異なり、英会話学校とも異なる、「大学」における英語教育のあり方が今後とも問われることになる。この答えを導き出すためには、本論のような教員個人の小さな取り組みとその報告が重要であると思われる。

### 注

筆者メールアドレス：ryutough@gmail.com

### 参考文献・資料

- (1) 高橋正夫『英語教育学概論(改訂新版)』, 金星堂, 2000.
- (2) Jack C. Richards, *Interchange Third Edition Student Book*, Cambridge University Press, 2005.
- (3) 科学技術振興機構, ザ・メイキング, サイエンスチャンネル  
[[http://sc-smn.jst.go.jp/4/series.asp?i\\_series\\_name=THE+MAKING](http://sc-smn.jst.go.jp/4/series.asp?i_series_name=THE+MAKING)]